神戸新聞 2026年05月10日 日曜日 面名 発言１ １３ 5ページ

編集委員インタビュー

船舶投資ファンド社長　篠田　哲郎さん(57)に聞く

クルーズ船「飛鳥」で地域を元気に、その戦略とは？

大型船によるクルーズ市場が世界的に活況だ。神戸港へも連日のように優美な姿を見せ、港町らしさを演出している。中でも、盤石の人気を誇るのがクルーズ船「飛鳥」のシリーズだ。その「磁力」に着目し、地域創生の舞台に生かす仕掛け人がいる。船舶投資ファンド「アンカー・シップ・パートナーズ」（東京）社長の篠田哲郎さん(57)。「海（船）から陸（地域）を元気にする」と熱く語る。一体どうやって？　と尋ねると、穏やかそうな篠田さんの口から、スケールの大きな事業とビジョンが次々と飛び出した。

（広岡磨璃）

「船舶投資ファンド」とは、どのようなビジネスですか。

「投資家から募った資金などで船舶を調達し、海運会社に使ってもらうというものです。これまでに累計80隻以上の大型船舶を保有してきました。2019年からは、日本郵船グループで『飛鳥』を運航する郵船クルーズの株式の半分を所有し、運営に参画しています」

「創業のきっかけは、新卒で入社した日本興業銀行（現みずほ銀行）です。歴史的に海運業界とのつながりが深い興銀で、担当部署に配属され、業界のダイナミズムに圧倒されました。家族経営の小さな船主会社が、数隻の船で100億円を超える資産を持ち、数人で大きな商売をしている。何より、海運は島国の日本に不可欠な社会インフラです。自分も船を持つ側になってみたい、と考えました。銀行としてお金を貸す側にいるけど、手続きを分かっているから借りるのも得意なはず、と。4年がかりで準備し、会社を立ち上げました」

創業して間もなく、今の事業にとって原点と言える出来事があったのですね。

「創業は2007年。すぐにリーマン・ショックが来て市況が一気に冷え込みました。そのとき、広島銀行さんから『地元にある小さな島の造船会社を助けてやってほしい』と相談が寄せられたんです。『その会社がつぶれると、島の経済が立ちゆかなくなる』と。迷いましたが、他の事業をすべてストップして銀行とともに支援に当たりました。（本業に期待する）投資家の皆さんからは非難されましたが、造船会社は無事、経営危機を乗り越えた。当時、自分たちの経営が傷んでいても、地元の企業を救った広島銀行さんの姿勢には畏怖の念すら覚えました」

「その時から、地域金融機関は地域のハブ（中核）だと捉えています。経済だけでなく、地域の文化や社会のハブとしても役割を果たしている。そんな各地の銀行を自分たちがゆるくつなげたら、日本を元気にできるんじゃないかと思い描いてきま

神戸市灘区、神戸大学

しのだ・てつろう　1968年京都府八幡市出身。大阪市立大商学部卒。92年日本興業銀行。2007年に創業し、19年から現職。郵船クルーズ代表取締役、神戸大大学院経営学研究科客員教授も務める。

「メディア」として地方の魅力発信／全国の地銀をつなぐ

神戸港に入港する「飛鳥Ⅲ」＝2026年３月

した。そのために、クルーズ船として抜きんでたブランド力を持つ飛鳥が必要だったんです」

飛鳥のブランド力をどのように地域創生に生かすのですか。

「まず、飛鳥があれば地域に人を運んでいける。乗客はいわゆる富裕層ですが、寄港地では豪華な過ごし方ばかりが喜ばれるわけではない。山奥の、地元の人しか知らないレストランに行くような『コト消費』も喜ばれるわけです。そうやって、各地の魅力が広まり、お金が落ちる。重要なのは、飛鳥が『メディア』の役割を果たせることです。昨年、運航を始めた飛鳥Ⅲには、47都道府県それぞれをテーマにした客室を設けました。室内に備える調度品やスイーツ、ドリンクは、各地の金融機関にプロデュースしてもらいました。地域の名品が全国に出て行くお手伝いです。アートの分野でも力を発揮します。船内に採用されることが作家や作品の格上げにつながるし、『動く美術館』として海外に持って行くこともできます」

「兵庫県の部屋」はみなと銀行がプロデュースし、豊岡かばんがルーツの貴金属ケースや三田青磁の香炉など、地域の奥行きを感じます。篠田さんには兵庫、そして神戸の地はどう映っていますか。

「まずは港町としての神戸の引力、素晴らしさがあります。街全体が港町としてすてきに設計されているから、海から入ってくるときの景色に、お客さまがすごく喜ぶんです。大阪、京都へアクセスしやすいのはもちろん、山側には兵庫県そのものの魅力がある。神戸は外せない寄港地です。付き合いの深い神姫バスさんを通じて、港から陸へと、地域をつないだ観光へのヒントをもらったエリアでもあります」

「昨年、神戸大学で寄付講座を設けました。事業を通じて関係を築いた地銀頭取や人間国宝の方々が、若い学生さんに生の経験を伝えています。経営学の西のトップである神戸大で、地域創生と観光経営に関する調査研究も進めます」

次は何を仕掛けますか。

「今まで世の中になかったファンド、通称『論語と算盤』ファンドを組成します。僕たちが実績を持つ船舶投資と、いわゆる社会インパクト投資（社会課題の解決と経済的利益の両立を図る投資）を組み合わせます。出資する地域金融機関に積極的に関与してもらいます」

「社会インパクト投資は、意義は理解されても規模が大きくならないのが課題です。じゃあ、僕たちが実績を持つ船舶投資と一緒にして、スケールアップさせたらいい。社会性の『論語』と、経済の『算盤』を一つにしたファンドです。ここでも全国の地域金融機関とのつながりが生きます。例えば、各地で地銀などがビジネスコンテストを開いていますが、全国大会がない。事業にしろ社会起業にしろ、全国コンテストをやれば若い人がどんどん手を挙げ、地域の課題解決策を全国規模に広げることができる。論語の部分だって、きちんとやれば算盤に合っていくはず。それを試してみたいんです」

「それと、身内に障害のある人がいたので、福祉分野にも恩返しがしたい。京都の大山崎で、福祉と工芸・文化を組み合わせた複合施設を開業します。就労する障害者にとって、経済的にプラスになるモデルの確立を目指します」

現在、ホルムズ海峡の封鎖が日本経済に影響を及ぼし、海運は私たちの生活とつながっていると感じます。

「海運が水道や電気と同様に社会インフラであることは、ずっと変わりません。ですが、ＢｔｏＢ（企業間取引）のビジネスですし、一般の方にはなじみが薄かった。転機は新型コロナウイルス禍です。あれだけ物流が滞り、需給バランスも崩れたことで社会インフラと認められるようになったと感じます」

「一方で海周りの業界のうち、海運会社は就職先でも人気ですが、造船業は元気がない。造船の仕事は昔のハードなイメージが根強いですが、環境はずいぶん良くなっています。若い人に、ぜひ造船業に注目してほしい。テクノロジーの導入もやや遅れている業界ですし、一旗揚げよう、という若者がどんどん出てきてくれたらうれしいですね」

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。